

博士学位論文審査要旨

2018年11月28日

論文題目： 竹田からくりの研究

学位申請者： 山田 和人

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 植木 朝子

副査： 国文学研究資料館 名誉教授 武井 協三

副査： 同志社女子大学大学院文学研究科 特別任用教授 廣瀬 千紗子

要 旨：

本論文は、まとまった研究がほとんどなかった竹田からくりを正面から取り上げたものである。寛文二年（一六六二）に旗揚げ興行をおこなって以来、大坂を中心に各地で盛んに興行を繰り返し、近世中期に一時退転するも、幕末から明治に至るまで続いた竹田芝居は、からくりと子供芝居から成っていた。本論文が中心に据えるのはからくりの考察である。

第一章では、愛知県半田市亀崎田中組に伝承されている「傀儡師」と、竹田からくりの絵画資料の「傀儡師」とを比較検討することによって、竹田からくりの演技や演出を明らかにした。第二章では、竹田からくり関連の絵画資料を博搜し、絵本、絵尽くし、番付に大別して紹介した上で、「難波女（布晒し）」「道成寺」「人間五常の臺」などの舞台演出の様相を描き出す。さらに、竹田からくりを手掛かりに、『用明天王職人鑑』の鐘入り、『南大門秋彼岸』の「邯鄲の枕」など、元禄期における人形浄瑠璃のからくりの演技・演出を推定した。第三章では、宇和島伊達藩家老桑折宗臣の日記から竹田からくりの興行の実態を明らかにし、また、多くの絵画資料から、百を超える演目を拾い出して、からくり台をベースとした分類を示した。第四章では、「六どう歌ねんぶつ」と「懐胎十月図」を取り上げて、中世以来の絵解きとの関連を考察し、これが古浄瑠璃の特殊演出としても用いられた可能性を指摘した。第五章では、からくりと手妻の動態や演技、演目について検討を加えている。第六章では、田中久重のからくり注目し、幕末から明治にかけての近代的なからくりについて考察、竹田からくりが与えた影響を指摘する。第七章では、「融大臣三日月雛形」「三笠山春日龍神」「道成寺」をとりあげ、謡曲の詞章がからくりの動態に深く関わり、精緻な展開を見せていることを明らかにした。第八章では、竹田からくり関連の資料を広く紹介し、絵双六などの遊技関連資料も貴重な研究資料であることを示した。

著者は、従来ほとんど研究が進んでいなかった竹田からくりの資料を網羅し、合理的に整理することで、今後の研究の基盤を整えた。その点だけでも学界への寄与は計り知れない。本論文では、随所でフィールド調査と文献調査が見事にかみ合い、鮮やかな結論が導き出されている。また、文学・歴史・美術・工学といった様々な領域から、効果的なアプローチがなされてもいる。学際的な多分野融合の上に、竹田からくりの豊饒な世界を提示した大作である。

よって、本論文は、博士（国文学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

学力確認結果の要旨

2018年11月28日

論文題目： 竹田からくりの研究

学位申請者： 山田 和人

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 植木 朝子

副査： 国文学研究資料館 名誉教授 武井 協三

副査： 同志社女子大学大学院文学研究科 特別任用教授 廣瀬 千紗子

要 旨：

上記審査委員3名は、2018年11月21日、午後6時半から約2時間半にわたり、徳照館2階第1共同利用室において、公開で学位申請者に対して口頭試問をおこなった。

学位申請者は、審査委員からの質疑に対して、提出論文についての専門的知識はもとより、関連する諸分野の事柄にわたって、的確かつ詳細な応答をおこない、学力水準の高さを証明した。また、語学（英語）についても十分な学力を有することが確認された。

以上のことから、本学位申請者の専門分野に関する学力ならびに語学力は十分なものであると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 竹田からくりの研究

氏名： 山田 和人

要旨：

江戸時代を通して、大坂での竹田からくりに対する興味や関心が高かったことは言うまでもない。江戸下りもしばしば行っており、江戸の庶民にも大いに歓迎された。さらに伊勢、名古屋を初めとして地方公演も盛んに行われた。道頓堀を中心にして各地へ巡業を行い、竹田芝居は全国的に人気を誇っていた。また、人形浄瑠璃や歌舞伎、見世物、その他浮世草子、読本、滑稽本、草双紙、俳諧、落書など幅広いジャンルにも関わりを持っており、からくりを中心とするからくり文化ともいうべき裾野の広がりを持っていた。

ところが、こうした竹田からくりに関する基礎的な研究はほとんど進んでおらず、たとえば具体的な演目数や、その演技や演出、上演の形態や興行の実態等の基礎的な研究が行われてこなかった。また、竹田からくりの研究のための基礎資料をいかに活用してその演技・演出を探るのか、研究方法も含めて解明すべきことが多い。

竹田からくりの研究が進んでこなかった理由として、竹田からくりの資料整備が遅れているために多様な研究の可能性が狭められてきたことや、文学研究の側では、からくりの研究が人形浄瑠璃の演出研究の補助的な役割を担ってきたために、見世物としてのあるいはパフォーマンスとしてのからくり研究がほとんど行われてこなかったこと、さらに祭礼と結びついた山車からくりを中心にしたフィールド調査と文学研究の側からのアプローチがうまく噛み合わず、両者をつなぐ研究へと展開しにくかったこと等がある。

また、竹田からくりの現存事例が少なく、演技や構造を把握することが難しかった。本書で取り上げた、愛知県半田市亀崎に伝承されている「傀儡師」や「布晒し」はその意味で貴重な事例と言える。こうした事例をさらに探索し、具体的な竹田からくりの演技や演出を探っていくことも重要である。

元来、からくり研究には学際的な側面があり、科学技術史や工学分野の研究からのアプローチ等もあるものの、それらが技術もしくは技術史に偏っており、文化として研究していく総合的・学際的な研究が進展してこなかった。実際の竹田からくりは、近世を通して、道頓堀に限らず江戸や地方興行も行っており、周辺の文学、歴史、美術等の諸ジャンルにも関わっている。いわばからくり文化とも言うべき位置を占めている。そうした意味においても、文化研究としてからくりをとらえ直す必要があるのではないか。

そこで、本書では、以下のような構成で、からくり文化として竹田からくりをとらえるという視点から、竹田からくりに関する基礎的な研究を行うとともに、各論で、竹田からくりの演技や演出の動態を明らかにするために、絵画資料を用いて、多角的・多層的にアプローチする方法論についても問題提起した。

第一章第一節では、竹田からくりの演技や演出を、愛知県半田市亀崎田中組に伝承されている「傀儡師」と竹田からくりの絵画資料「傀儡師」との比較検討によって明らかにできる可能性を提示した。からくりの演技は、人形とからくりの構造によって生み出されるが、「傀儡師」を分析することによって、竹田からくりの演技と構造を知ることができる。第二節、第三節では、竹田からくりの演技や演出を知る上で一等資料である田中組の「傀儡師」を詳細に調査・分析して、それぞれの人形及び舟、箱等の動態と構造を明らかにした。

第二章第一節では、からくり研究においては、人形や装置が瞬時に変化していく演技の動態を把握しなければならないために文献資料の中でもとりわけ絵画資料の占める比重が大きくなるため、からくりの動態把握のためには絵画資料の収集・分析が不可欠である。従来、竹田からくり関連の基礎資料ともいべき絵画資料の調査・整理・集成の作業は国文学研究の側でもほとんど試みられなかったもので、ここでは私に調査・収集してきた資料の整理を試みた。

第二節では、竹田からくりの人形の動態を把握するための研究資料として、絵画資料が重要な役割を果たし得る可能性を指摘した。また、からくり研究の絵画資料としての描法に注目し、吹き出しと二画面連続の描法や複数のからくり台による演出を示す描法を指摘するとともに、絵画資料による舞台演出の研究の可能性についても論じた。

第三節では、竹田からくりの絵画資料の分析によって、人形浄瑠璃の舞台演出を探ることができる可能性について、元禄期の宇治座の『丹州千年狐』の山伏人形のからくり注目して、それが竹田からくり「人間五常の臺」と同種のからくりであること、さらにこのからくりが掲載された赤本『ぎおん大まつり』の挿絵も含めて比較検討した。

第三章第一節では、竹田からくりの興行の実態を宇和島伊達藩の家老桑折宗臣の日記を手掛かりに、寛文、延宝期の竹田芝居の動向を探り、竹田芝居の興行の実態を明らかにした。第二節では、からくりと手妻の舞台について考察した。ここでは舞台に注目して、竹田からくりや子供芝居の演技や演出を絵画資料によって明らかにしようと試みた。第三節では、調査・収集した竹田からくりの絵画資料から演目を整理・集計した結果、百演目を超えることが明らかになった。また、からくりが、ひとつのからくり台で演じられる単独型、複数のからくり台を連動させて演出される複合統合型、複数のからくり台をひとつの演目名で一括りにして上演される複合包括型に分類できることを指摘した。

第四章では、竹田からくりの演技・演出の中に、からくりの本義である瞬間の変化・変相を、文字通り奇蹟・奇瑞としてとらえ、素材となった伝承を舞台化したからくりの動態を探った。

第一節で取り上げた「六どう哥ねんぶつ」は、日暮林清が語る歌念仏の地獄の変相を立体化したからくりであり、絵解きの素材として用いられる掛け幅の地獄絵を動態化したからくりともいえる。第二節では、「懐胎十月図」は、懐胎から出産に至るまでの胎内の変化を表したからくりであり、胎内の変化を真言密教の呪具や人間の身体の変化として表すとともに、出産に至るまでの十月の守護仏の加護の有様を次々と見せた。

第五章第一節では、手妻芸尽くしとしての伊藤出羽の『若水千歳狐』を手掛かりに、手妻芸の動態及びその演技を探っている。第二節では、享保以降の伊藤出羽のからくり子供芝居の興行の実情やからくりの演目について整理している。具体的には伊藤出羽権掾のからくり絵尽しを通して、からくりと手妻の動態や演技、演目について検討を加えるとともに、伊藤出羽権掾の活躍についてもまとめている。

第六章第一節では、田中近江大掾すなわち田中久重は、従来、科学技術史の視点から日本の科学技術の黎明期に活躍した偉大な技術者としてとらえられてきたが、芸能研究の立場から改めて田中近江大掾のからくりを見直した。

第二節では、田中近江の代表作である「弓曳き童子」の着想が竹田からくりにあることを絵画資料によって推定し、吹き矢のからくりとともに巧みな射術の演技と的について指摘している。

第七章第一節、第二節では、「融大臣三日月雛形」と「三笠山春日明神」を具体的に分析し、からくりの動態を探るために謡曲の詞章をどのように関連資料として利用していくことができるのか、謡曲の詞章とからくりの絵画資料を組み合わせるとどこまでからくりの動態を明らかにできるのか、探っている。第三節もからくりと能の関連を、「道成寺」を素材として明ら

かにしようとした。また、琉球使節が見た竹田芝居「道成寺」が、沖縄の組踊「執心鐘入」の成立に深くかかわるのではないかという仮説を提示している。

第四節では、浮世草子『太平色番匠』『儻偶用心記』の挿絵と記事にからくり研究の立場から考察を加え、ここで取り上げた浮世草子の記事・内容は、その当時のからくりの実態を推定する上で貴重な資料たり得ていることを明らかにした。第五節では、式亭三馬の滑稽本『早替胸のからくり』と『人心覗からくり』の挿絵に、竹田からくり「傀儡師」が趣向として取り込まれており、そこには作者のからくりについての興味と知識に基づいた滑稽本としての趣向の多様性を見出すことができることを指摘した。

第八章では、竹田からくり関連の資料を紹介している。第一節では、万治年間の竹田芝居の興行の実情を伝える資料として、西末吉家の文書のなかの「長井宗左衛門長重覚書」と「土橋宗静日記」を紹介している。これらは、万治二年（一六五九）五月に竹田近江が近江少掾を受領した翌年三月の記録であり、竹田芝居の最も古い興行記録と言える。第二節では、寛保元年（一七四一）に竹田近江清英が前年に近江大掾受領披露興行のために江戸下りした時の評判を当て込んで、役者評判記『役者披顔桜』（寛保二年三月）の「江戸三芝居惣役者目録」は「見立竹田狂言からくり名尽」の趣向を構え、それぞれの役者を竹田芝居の演目に仮託して評していることを指摘した。第三節では、稀書複製会叢書本の『大からくり絵尽』と同版の国会図書館本『竹田新からくり』を紹介している。従来、『大からくり絵尽』が『竹田新からくり』という書名であることは指摘されていたが、国会図書館本がそのことを証しており、同書が題簽、脇方簽も備えた資料であることを示した。第四節では、寛政二年（一七九〇）刊と推定される番付を紹介しており、これは寛政年間の竹田芝居の江戸興行の実際をうかがえる貴重な資料であることを指摘した。第五節では、旧稿の「竹田からくり『傀儡師』について」以後に見出された「傀儡師」の絵画資料を紹介している。第六節では、東京国立博物館所蔵の竹田からくりを当て込んだ双六を、竹田からくりの絵画資料によって検証した。その結果、そこに描かれた画像は竹田からくりの絵画資料とほぼ一致しており、こうした遊技関連資料も竹田からくりの研究資料として貴重であることが明らかになった。